紹介

金永哲著
『「満洲国」期における朝鮮人満洲移民政策』

本書は、満洲事変後から終戦にいたる「満洲国」への朝鮮人農業移民について、移民統制政策の全体像を体系的に把握することを通して、当該期の在満朝鮮人の実態を解明するものである。これはまた、世界最大の朝鮮民族コミュニティである中国・東三省「朝鮮族」の社会形成史の解明につながる意義をもつ。内容構成は、政策展開の時期区分に即して以下の四章で構成される。

第一章「在満既住朝鮮人に対する統制・「安定」政策の開始」（一九三一～三二年）では、満洲事変後の避難民のために外務省、朝鮮総督府、関東軍が設置した「集団部落」「安全農村」について分析し、関東軍の「集団部落」は主に抗日勢力の鎮圧が目的であったのに対し、朝鮮総督府の「集団部落」「安全農村」は自作農創設を目指すものであったが、現地での抗日運動の高揚に伴い次第に「治安維持」機能に変化していったことを解明した。また朝鮮総督府の「安全農村」経営について、鉄嶺農村の事例から「朝鮮人民会」や保護援助機関「金融会」「農務稷」など自治制度が行われていたことを明らかにした。

第二章「朝鮮人満洲農業移民統制政策の成立期」（一九三二～三六年）では、「満洲国」成立後の移民政策の立案過程における朝鮮総督府と関東軍の対立を分析する。日本人と朝鮮人のどちらを農業移民の主体とするかをめぐり、朝鮮総督府が日本人は朝鮮・満洲への工業移民とし、満洲への農業移民は高い生産性を期待できる朝鮮人を入植するよう主張したのに対し、関東軍は治安上の理由から日本人農民を大量に移民させ（一九三二年から試験移民として実施）、朝鮮人に対しては新規入植の制限および在満既住民の安定・統制を方針とした。そして結果的に、関東軍が満洲移民政策の主導権を取ることにより、「満洲国」期を通じて朝鮮人の農業移民が抑制されたことを指摘する。また、この時期に朝鮮人が増加するのは自由移民であり、その多くが水田を求めて北部満洲に入植し順調に定着していった様子も明らかにされる。

第三章「朝鮮人満洲農業移民統制政策の変遷期」（一九三六～四〇年）では、二・二六事件を契機として満洲移民が「国策」となり、日本では「二〇年間百万戸移民計画」が、朝鮮では「一五年間一六万戸移民計画」が策定されるなかで、朝鮮人の満州移民政策がどのように展開したのか、具体的な統制強化の変遷と入植過程を分析する。この時期には朝鮮人の移民助成会社として「満鮮拓殖」が設立されて「官斡旋」を行うなど本格的な統制移民が開始し、朝鮮人移民は「集団」「集合」「分散」の三形態をとった。また、関東軍は日本人農業移民を「本格的移民段階」として大量に北部満洲の水田地帯に入植する方針を取り、朝鮮人農民は新規移民・既住ともに抗日勢力が盛んな東部満洲の間島・東辺道に集住させたが、この東部満洲は畑作地域であったため、米作を生業とする朝鮮人農民の経済・生活基盤が弱体化したことが指摘されている。

第四章「朝鮮人満洲農業移民統制政策の衰退期」（一九四〇～四五年）では、先行研究では殆んど明らかにされなかった太平

洋戦争期について考察する。一九四〇年の「満洲移民政策基本要綱」公布により満洲国（関東軍）に全ての権限が委譲されると、「満鮮拓殖」会社は「満洲拓殖」会社に統合される。朝鮮人農業移民も日本人と同様に「開拓民」と改称されて政治的・軍事的役割を課せられるようになり、食糧増産と国防を目的として従来は入植が禁じられていた「満」ソ国境の満洲北部の零細未開墾地に動員された。一方、朝鮮内では毎年の割当戸数を充当するために地方行政の面職員が「過大宣伝」による募集を行い、中南部を中心に朝鮮から農民が北満に渡ったが定員割れが続いたこと、また「朝鮮青年義勇軍」や農村振興運動を背景に「分村移民」が企画されたものの成功せず、朝鮮人農業移民の統制政策は衰退に向かったことが明らかにされた。

以上、「満洲国」期の朝鮮人農業移民の全体像が明らかにされたことから、国策である「満洲移民」は朝鮮人では振るわず、「満洲国」期の在満朝鮮人の増加は自由移民によること、その原因として朝鮮総督府の朝鮮人移民積極策にかかわらず、関東軍の抗日勢力への治安対策に関連した朝鮮人抑制方針があったことが明らかになった。また満洲での朝鮮人村落の生活実態について事例が紹介されている点は貴重な成果であり、すでに研究が進んでいる都市移民・商業移民と併せて在満朝鮮人の社会文化やアイデンティティを解明するうえで本書の緻密な過程解明はその土台となるものと高く評価される。近代東アジア史をめぐる意味を深めていくうえでは、こうした在満朝鮮人研究の視点は、他の移民研究とともにナショナル・ヒストリーを超えた近代社会のあり方を捉える試みとして期待されよう。

（A5版　三五二頁　二〇一二年二月
昭和堂　税別五五〇〇円）

（長沢一恵　天理大学非常勤講師）

会　告

二〇一三年度史学研究会大会および総会は、予定どおり一一月二日（土）午後一時より京都大学文学部第一・二講義室にて開催されました。

公開講演は、水野直樹、小林致広の両氏により左記の演題で行われ、盛会裡に終わりました。

植民地の時代を生きた朝鮮人エリート
——三高卒業生朴錫胤の生涯——
水野　直樹氏

メキシコ・エスノヒストリー研究とフンボルトの将来した絵文字資料
小林　致広氏

なお、大会と総会に先立って開催された定例の理事会・評議員会において、二〇一三年度会務報告がなされました。